

杜甫「為閩州王使君進論巴蜀安危表」 詠注

加 固 理 一 郎

本稿は杜甫「為閩州王使君進論巴蜀安危表」の詠注である。底本には蕭滌非主編『杜甫全集校注』（人民文学出版社、略称「蕭本」）を用い、校勘・詠注には『宋本杜工部集』（続古逸叢書影印本、略称「宋本」）、元・高崇蘭『集千家註批点杜工部文集』（元

称「謝本」）の諸本を参照した。注で引用した杜甫の詩文には、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩詠注』（講談社）の通し番号と、仇兆鰲『杜詩詳注』（『詳注』）の巻数を示す。

・会文堂刊本、天理図書館善本叢書『集千家註批点杜工部詩集』、略称「高本」）、清・錢謙益箋注『杜

本文は原則として底本に従ったが、注記せずに正字に改めた場合がある。訓読・語釈では校勘を除いて、新字体を用いた。

工部集』（大通書局杜詩叢刊影印本『錢牧齋先生箋注杜詩』、上海古籍出版社排印本『錢注杜詩』、略称「錢本」）、清・朱鶴齡輯注『杜工部文集』（京都

本詠注は筆者が草稿を作成し、杜甫散文研究会（二〇二一年十月十七日・十二月五日、オンライン）での検討を経て成ったものである。底本に従い、題と本文八段に分ける。

大学所藏金陵葉永茹万卷樓刻本『杜工部全集』、河

【 解 題 】

北大学出版社排印本『杜工部詩集輯注』、略称「朱本」）、清・張潛『讀書堂杜工部文集註解』（大通書局杜詩叢刊影印本『讀書堂杜詩集（附）文集註解』、

この文章は閩州刺史の王某（名は不詳）が代宗皇帝に上奏した表を代作したものである。内容は巴蜀の危機的な状況について論じている。杜甫の詩に、「李梓州・王閩州・蘇遂州・李果州四使君に陪して惠義寺に登る」（〇六二七『詳注』卷一二）、王

閩州の筵にて十一舅の惜別の作に酬い奉る」(〇六七三『詳注』卷一二)、「江亭、玉閩州の筵に蕭遂州を餞す」(〇七〇三『詳注』卷一三)があり、これらから見て、王某は杜甫の支援者であったと思われる。

杜甫五二歳、広徳元年(七六三)冬に閩州で作られた。諸注釈に広徳元年の作とある。劉開揚は、文中に「昨窃聞諸道路出吐蕃已來、草窃岐隴、逼近咸陽」とあるのが、『旧唐書』卷一一・代宗紀に見える広徳元年十月に吐蕃が京畿を犯したことに当るので、ここに編年できるとする(「杜文窺管統編」『柿葉楼文集』西南財經大學出版社、二〇〇四、五六一ページ)。また、文中に「吐蕃今下松維等州」とあるが、これは『旧唐書』卷一一・代宗紀および『資治通鑑』唐紀三九ともに広徳元年十二月のこととしているため、冬十二月に制作されたと考えられる。

【題】

爲閩州王使君進論巴蜀安危表

閩州の王使君の爲に巴蜀の安危を論ずるを進

むる表。

閩州の王使君のために巴蜀の平穩と危機の情勢を論じて上奏する表

閩州 地名。現在の四川省閩中市。玄宗先天元年

(七一二)に玄宗の諱を避けて隆州を閩州に改めた。天寶元年(七四二)、閩中郡に改めた。肅宗乾元元年(七五八)、また閩州に改めた。山南西道に属する。

使君 州郡の長官の尊称。州では刺史を指す。

巴蜀 現在の四川省一帯。秦漢に巴・蜀二郡が設けられた。

安危 平穩と危機。杜甫「憂いを解く」(一三七四『詳注』卷二二)「百慮して安危を視るは、分明なり巽賢の計」。

【一】

臣某言。伏自陛下平山東、收燕薊、泊海隅、萬姓感動、喜王業再康、瘡痍蘇息。陛下明聖、社稷之靈、以至於此。然河南河北、貢賦未入、江淮轉輸、異於曩時。唯獨劍南、自用兵已來、稅斂則殷、

部領不絶、瓊林諸庫、仰給最多。是蜀之土地膏腴、物産豊富、足以供王命也。

臣某言す。伏して陛下山東を平らげ、燕薊を取めしより、海隅に泊びて、百姓感動し、王業再び康らかに、瘡痍蘇息するを喜ぶ。陛下明聖にして、社稷の靈、以つて此に至らしむ。然れども河南北は、貢賦未だ入らずして、江淮の転輸は、曩時に異なれり。唯だ独り劍南のみ、用兵より已来、税斂則ち殷んにして、部領絶えざれば、瓊林の諸庫、給を仰むことも多し。是れ蜀の土地膏腴、物産豊富にして、以つて王命に供うるに足ればなり。

臣下の某が申し上げます。代宗皇帝陛下が安史の反乱軍に蹂躪された山東の地を平定し、その根拠地の燕薊を回復してから、遠い海岸に至るまでの万民は感激しております。そして王朝の政治は再び安定し、民衆が痛ましい困窮から息を吹き返したのを喜びいたします。陛下は道理に明るいため、社稷の神靈がこれを成し遂げさせてくれました。しかしながら、河南北地方からはまだ税

収を得られず、江淮地方からの輸送は、以前と異なつて難しい状況になっていきます。ただ劍南の地方だけは、安史の乱以来、税収が豊かであり統率が失われたことがないので、宮中の瓊林などの倉庫では、この地からの供給に最も多く頼っているのです。これは蜀の土地が肥沃で物産が豊富なので、御命令に十分に応えられるためでもあります。

山東 太行山脈以東の地区。安史の乱で戦場になつた。杜甫「洗兵行」(〇二五三『詳注』卷六)「中興の諸将山東を収む、捷書夜報じて清昼も同じ」。燕薊 地名。幽薊または幽燕ともいう。治所は幽都県(現在の北京市の一部)にあつた。燕・薊など十一州を含む。安祿山が乱を起こした場所。杜甫「郭中丞が太僕卿を兼ね隴右節度使に充てらるるを送り奉る三十韻」(〇一七四『詳注』卷五)「燕薊に封豕奔り、周秦に駭鯨触る」。

泊 朱本は「自」に作る。

海隅 海岸地方。僻遠の地方を指す。『書経』君夷「丕いに冒むれば海隅の出日まで、率俾せざるは罔からん」。杜甫「台州の鄭十八司戸を懐う有

り」(〇二七一『詳注』卷七)「海隅小吏微かなり、眼暗くして髮素を垂る」。

万姓 万民。『書経』立政「商に式りて命を受け、万姓を奄旬せしむ」。杜甫「李校書を送る二十六韻」(〇二一七『詳注』卷六)「乾元元年の春、万姓初めて安宅す」。

高本・錢本・朱本・張本・仇本・全唐文は「萬里百姓」に作る。

感動 心を動かされる。宋玉「登徒子好色賦」(『文選』卷一九)「蓋し徒に微辞を以つて相感動す」。

康 高本・張本は「造」に作る。

瘡痛 瘡は切り傷、痛は打ち身。民衆の生活が困窮している状況の比喩。『顔氏家訓』省事「坑穽殊に深く、瘡瘡未だ復せずして、縦い死を免るを得たるも、家を破らざる莫し」。

蘇息 息を吹き返して安らぐ。『書経』仲虺之誥「后来其蘇」の孔伝「我が君の来るを待ちて、其れ蘇息すべし」。

社稷 帝王や諸侯が祭る土地の神と穀物の神。杜甫「徒步帰行」(〇一八二『詳注』卷五)「国の社稷今是の若し、武もて禍乱を定むるは公に非ずして誰ぞ」。

貢賦 土地にかけられた税。唐代の貢は各地の貢

納物で、賦は各地の産物で調にあたる。『唐六典』卷三・尚書戸部「凡そ天下十道、土の出だす所に任せて貢賦の差を為す」。杜甫「感有り五首」其三(〇六〇七『詳注』卷一一)「洛下に舟車入る、天中にして貢賦均し」。

江淮 長江と淮河の間の地域。杜甫「復た愁う十二首」其九(一一八三『詳注』卷二〇)「転ずるに任ず江淮の粟、添うるを休めよ苑囿の兵」。

曩時 さきごろ。さきの日。「江淮転輸、異於曩時」とは、安史の乱によつて汴水の水運が使えなくなつた状況を言っている。これは『資治通鑑』唐紀三九・代宗広徳二年に「喪乱より以来、汴水堙廢し、漕運せる者江・漢より梁・洋に抵り、險しきを迂けて勞費す」とある。

唯 朱本・仇本・全唐文は「惟」に作る。

劍南 地名。劍門関の南。太宗貞観元年(六二七)に益州を改めて劍南道とした。現在の四川省の大部分と雲南省・貴州省・甘肅省の一部を含む。この地に劍南節度使が置かれ、さらにそれが劍南西川節度使と劍南東川節度使に分けられたことについては、『新唐書』卷六七・方鎮表四の開

元七年（七一九）に「劍南支度營田処置兵馬経略使を升せて節度使と為す」とあり、至徳二載（七五七）に「劍南節度を更めて西川節度使と号し、成都尹を兼ね。：梓・遂・綿・劍・竜・閬・普・陵・瀘・榮・資・簡十二州を以つて東川節度に隸す」とある。

「劍」宋本は「劔」、高本は「劔」、全唐文は「劍」に作る。

用兵 武力を使用し戦争を行う。ここでは安史の乱を指す。

已 高本・朱本・張本・仇本・全唐文は「以」に作る。

斂 高本は「劔」、錢本・朱本・張本は「斂」に作る。

瓊林 宮中の倉庫の名。開元年間に創設された。『旧唐書』卷一三九・陸贄伝「贄諫めて曰わく『瓊林・

大盈は古より悉く其の制無く、諸を耆旧の説に伝うるに皆開元より創ると云う』と」。

仰給 供給に頼る。『史記』卷三〇・平準書「虜数万
人皆厚賞を得、衣食は給を県官に仰ぐ」。

膏腴 土地が肥沃である。『後漢書』卷一三・公孫述伝「蜀地は沃野千里、土壤は膏腴なり」。杜甫「岳麓山道林二寺行」（一三九五『詳注』卷二二）「桃源の人家制度し易く、橘洲の田土仍お膏腴」。

物産 産物。「吳都賦」（『文選』卷五）「徒だ江湖の峻けん岐びにして、物産の殷充なるを以つてす」。

繁富 豊富である。左思「魏都賦」（『文選』卷六）「此の若きの属、繁富かこう夥ごなり」。

王命 帝王の命令。『書経』康誥「大いに王命を放つれば、乃ち徳用つて又むるに非ず」。

【二】

近者、賊臣悪子、頻有亂常。巴蜀之人、横被煩費、猶相勸勉、充備百役、不敢怨嗟。吐蕃今下松維等州、成都已不安矣。楊琳師再脅普合、顛顛兩川、不得相救、百姓騷動、未知所裁。況臣本州、山南所管、初置節度、庶事草創、豈暇力及東西兩川矣。

近者、賊臣悪子、頻りに常を乱す有り。巴蜀の人、横に煩費せらるるも、猶お相勸勉し、百役に充備して、敢て怨嗟せず。吐蕃今松維等の州を下し、成都已に安からず。楊琳の師再び普合を脅かし、顛顛たる兩川、相救うを得ざれば、百姓騷動するも、未だ裁く所を知らず。況んや臣の本州は、山南の管する所にして、初めて節度

を置き、庶事草創なれば、豈に力の東西、兩川に及ぶに暇あらんや。

近ごろ、この地では悪人どもがたびたび秩序を乱しました。そこで巴蜀の人々は、官吏からみだりに費用を求められましたが、それでも励まし合つてさまざまな労役に参集し、あえて恨み事を言いませんでした。ところが今や吐蕃は松州や維州などを下し、成都もすでに安全ではなくなりました。さらに揚子琳の軍は二度にわたつて普州と合州を脅かしました。しかし、これら大波のごとき戦乱の起こる劍南西川と劍南東川の兩地域に対する救援が行われませんでしたので、民衆が騒ぎ立ちました。これをどう裁くべきかまだわかりません。まして私の治める閬州は、山南西道の管轄であり、この地には新たに節度使が置かれ、多くのことを始めたばかりなので、劍南東川と劍南西川の地に力を及ぼす余裕はありません。

賊臣悪子 賊臣は奸臣、悪子は不良少年。ここでは両者を合わせて悪人を言う。蕭本の注では段子璋・徐知道らを指すとす。段子璋は『新唐書』

卷六・肅宗紀の上元二年、徐知道は『新唐書』卷六・代宗紀の宝応元年に見える。杜甫「荆南兵馬使太常卿趙公の大食刀の歌」(一〇五六)『詳注』卷一八)「賊臣悪子紀を干すを休めよ、魍魅魍魎徒らに為すのみ」。

乱常 秩序を乱す。摯虞「思游賦」(『全晉文』卷七六)「唐(堯帝)は天に則りて民に咨い、癸(夏の桀王)は常を乱して虞れを感ず」。

煩費 たいへんに費用がかかる。『史記』卷三〇・平準書「江淮の間蕭然として煩費す」。杜甫「壮游」(〇九五五)『詳注』卷一六)「隅を挙げて煩費を見し、古を引きて興亡を惜しむ」。

猶相 高本は「獨自」、朱本・張本・仇本は「猶自」に作る。

勸勉 すすめはげます。はげみつとめる。李陵「蘇武に答うる書」(『文選』卷四一)「以つて耳に入らざるの歎を為し、来りて相勸勉す」。杜甫「八哀詩、故の秘書少監武功の蘇公源明」(〇九四九)『詳注』卷一六)「之れを垂れて来者を俟ち、始めを正して勸勉を徴す」。

百吐蕃 高本は「自」に作る。七世紀から九世紀にかけてチベット族が建

てた政權。この時期には唐の辺境を侵し、広徳元年には長安まで攻め入った。杜甫「入奏行、西山檢察使竇侍御に贈る」(〇五一四)『詳注』卷一〇)「吐蕃は憑陵にして氣頗る粗なり、竇氏の檢察たるは時の須^{もと}めに応ず」。

松維等州 松州は現在の四川省アバチベット族羌族自治州松潘県。維州は四川省アバチベット族羌族自治州理県。『資治通鑑』唐紀三九、代宗広徳元年「吐蕃松・維・保三州及び雲山の新たに築ける二城を陥る」。

成都 現在の四川省成都市。至徳二年(七五七)、玄宗が蜀に行幸すると、蜀郡を成都府と改称し、唐王朝の陪都の南京とした。劍南道が東西兩川に分けられると、成都は劍南西川節度使の治所となった。上元元年(七六〇)に京の称を廃止したが、成都府の名は変わらなかった。

楊琳 朱本の注では楊子琳とされる。楊子琳についての記事は『新唐書』卷一四四・崔寧伝に見える。ただし、楊子琳が普州・合州を脅かしたことは記載されていない。

普合 普州と合州。普州は現在の重慶市潼南区。合州は現在の重慶市合川区。

顯顯 波高いさま。ここでは戦乱の起こっている

ようすにたとえる。枚乘「七発」(『文選』卷三四)「顯顯^{こうこう}印印たり」。

宋本・高本・錢本・謝本は「顯顯」、全唐文は「禺禺」に作る。

兩川 劍南西川と劍南東川を指す。松州と維州は西川に属し、普州と合州は東川に属す。

山南 山南東道と山南西道があるがここでは後者。

閬州は山南西道に含まれる。『元和郡県志』卷二二・興元府「今山南西道節度使の理むる所為り。州十七を管す。興元府：閬州：」。山南西道節度

使はこの文章が書かれた広徳元年に置かれた。『新唐書』卷六七・方鎮表四・広徳元年「山南西道

防禦守捉使を升せて節度使と為し、尋いで降して觀察使と為す」。

【三】

伏願陛下聽政之餘、料巴蜀之理亂、審救援之得失、定兩川之異同、問分管之可否、度長計大、速以親賢出鎮、哀罷人以安反仄。犬戎侵軼、羣盜窺伺、庶可遏矣。而三蜀、天府也、徵取萬計、陛下忍坐見其狼狽哉。不即爲之、臣竊恐蠻夷得恣屠割耳。實爲陛下有

所痛惜。必以親王、委之節鉞、此古之維城盤石之義明矣。陛下何疑哉。在近擇親賢、加以醇厚明哲之老爲之師傅、則萬無覆敗之跡、又何疑焉。

伏して願わくは陛下聴政の余に、巴蜀の理亂を料り、救援の得失を審らかにし、兩川の異同を定め、分管の可否を問ひ、長を度り大を計り、速やかに親賢を以て出だして鎮めしめ、罷人を哀れみて以て反仄を安んぜんことを。犬戎侵軼し、群盜竄伺するを、庶わくは遏むべし。而して三蜀は、天府なりて、徵取すること万計なれば、陛下坐らに其の狼狽するを見るに忍びんや。即ち之を為さずんば、臣窃かに蛮夷屠割を恣にするを得るを恐るのみ。実に陛下の為に痛惜する所有ればなり。必ず親王を以て、之れに節鉞を委ぬるは、此れ古の維城盤石の義明らかなり。陛下何ぞ疑わんや。近きに在りて親賢を択び、加うるに醇厚明哲の老を以て之れを師傅と爲さば、則ち方にも覆敗の跡無きこと、又何ぞ疑わん。

平伏してお願い申し上げるのは、陛下が朝廷で

の政務の余暇に、巴蜀の治乱の状況を推し量り、救援策の得失について明らかにし、劍南東川と劍南西川の異同をはつきりさせ、それらを分けて管理する可否を問ひ正されることであり、さらにその長所をお考えになつて、すみやかに皇族のお身の賢者を鎮護に出向かせ、疲れた人民を憐れみ不安を和らげることです。そして異民族が突入し盜賊の群れが野望を抱くのを、押さえ込むようお願いします。さて三蜀は豊かな土地で、何万もの税を徴収できますので、陛下はその地のたいへん困難な状況を傍観してはいられないでしょう。ただちにこの策を行わなければ、異民族が思うままに土地を切り取り奪うことになるのを私はひそかに恐れるばかりです。それはまことに陛下のために心を痛めるものです。必ず親王に権力を委ねるべきであるのは、古代において宗族を諸侯に封じ守りを固めたのと同じ意義があるのが明らかだからです。陛下はどうしてそれを疑う必要がありません。陛下のお近くから皇族のお身内の賢臣を選び、加えて篤実で賢明な長老を相談役とすれば、巴蜀が転覆する形勢がまったくなくなるのは、疑いあり

ません。

理乱 治乱。『管子』霸言「故に理乱は上に在るなり」。杜甫「花石戍に宿る」(一三七九『詳注』卷二二)「茫茫たり天造の間、理乱豈に恒数あらんや」。

親賢 親戚であり賢明である人物。任昉「齊の竟陵文宣王の行状」(『文選』卷六〇)「地は尊く礼は絶れ、親賢貳莫し」。杜甫「感有り五首」其四(〇六〇八『詳注』卷一一)「鉞を授けて親賢往き、宮を卑くして制詔遙かなり」。

罷人 疲れた人。杜甫「花石戍に宿る」(前出)「罷人村に在らず、野圃泉自ら注ぐ」。

反仄 落ち着かない。『三国志』卷一九・陳思王植伝「踊躍の懐あれども、瞻望して反仄す」。

犬戎 古代の異民族の名から、異民族の蔑称として用いられた。『左伝』閔公二年「春、虢公、犬戎を涓洸に敗る」。杜甫「旗を揚ぐ」(〇七五五『詳注』卷一三)「三州(松州・維州・保州)犬戎に陥り、但だ見る西嶺の青きを」。

「犬」高本は「大」に作る。『左伝』隱公九年「彼は徒、我は

車、懼るるは其の我を侵軼せんことを」。

窺伺 身分不相応なことをうかがい望む。『晉書』卷四・惠帝紀「河間王顥、齊王冏の神器を窺伺するは、君を無みするの心有りと表す」。

三蜀 漢代に置かれた行政区画。蜀郡・広漢郡・犍為郡。左思「蜀都賦」(『文選』卷四)「三蜀の豪、時に來り時に往く」。杜甫「野望」(〇五八六『詳注』卷一一)「山は越嶲に連なりて三蜀に蟠り、水は巴渝に散じて五溪に下る」。

天府 土地が肥沃で、物産が豊富な地域。蜀を称した例には『晉書』卷八三・袁喬伝「蜀土富実にして、号して天府と称す」がある。

「天」高本・朱本・張本・仇本は「大」に作る。

狼狽 苦しむ。困り果てる。杜甫「北征」(〇一八八『詳注』卷五)「憶う昨狼狽の初め、事は古先と別なり」。

蛮夷 主に南方の異民族を指すが、また広く異民族の蔑称として用いられた。『書経』堯典「遠きを柔んじ遷きを能くし、任人を難んずれば、蛮夷率って服せん」。杜甫「草堂」(〇七三九『詳注』卷一三)「昔我草堂を去りしとき、蛮夷成都に塞がる」。

「夷」朱本は欠字とする。

屠割 屠殺し切り分ける。ここでは蜀の土地を切り取り奪うことをたとえている。

實 朱本は「寔」に作る。

親王 皇帝や国王の親族で王に封ぜられた者。唐代には皇帝の兄弟と皇子を親王とした。『新唐書』卷四六・百官志一「皇兄弟、皇子は、皆国に封じて親王と為す」。

節鉞 符節（わりふ）と斧鉞（おの、まさかり）。権力のしるしとして將軍に授けられる。杜甫「柏中丞兼び子姪数人の除官の制詞を覽、因りて父子兄弟の四美を述べ、糸綸を歌うを載す」（一〇四九『詳注』卷一八）「方に節鉞の用に当らば、必ず葭沚の根を絶たん」。

維城 国を守る城。皇子や宗族をたとえる。『詩經』大雅・板「徳を懐えば維れ寧く、宗子は維れ城」。『後漢書』卷五〇・贊「孝明、胤を伝え、維城八国あり」。

盤石 安定して堅固である大石。宗室で諸侯に封ぜられた者をたとえる。曹冏「六代論」（『文選』卷五二）「徒だに諸侯の強大にして、盤石膠固たり」。杜甫「秋日、荊南にて懐いを述べ三十韻」（一

三三二『詳注』卷二一）「盤石、圭は多く剪り、凶門、戟は少しく推せ」。

「盤」仇本・全唐文は「磬」に作る。

義 全唐文は「計」に作る。

近 高本・朱本・張本・仇本は「選」に作る。

醇厚 篤実で飾り気がない。

明哲 賢明である。道理を見通せる。『書經』説命上「之を知るを明哲と曰い、明哲、実に則を作る」。杜甫「北征」（前出）「周漢再興するを獲たるは、宣光果たして明哲なればなり」。

師傳 太師と太傅、または少師と少傅を合わせた称。天子や高官を助ける官。

覆敗 転覆し亡びる。地域が大混乱の状況になる。『後漢書』卷一六・鄧禹伝「是の時三輔連なりて覆敗し、赤眉の過ぐる所残賊あり、百姓帰する所を知らず」。

【四】

其次付重臣舊徳、智略經久、舉事允愜、不隕穫於蒼黃之際、臨危制變之明者。觀其樹勳庸於當時、扶泥塗於已墜。整頓理體、竭露臣節、必見方面小康也。

其の次に重臣旧徳の、智略経久、挙事允愜にして、蒼黄の際に隕穰せず、臨危制変の明ある者を付けよ。其の勲庸を時に當りて樹て、泥塗を已に墜ちたるに扶け、理体を整頓し、臣節を竭露するを觀、必ず方面の小康を見るならん。

その次に、徳の高い老臣で、長きにわたつてすぐれた知略をめぐらして行いは適切であり、転変の時にも行き詰まらず、危機に臨んで変化を抑えるわざに明るい者に補佐させてください。そうすれば、今この時直ちに手柄を立てて泥道のような苦境に陥りつつある者を救い出し、治世の綱要を整えて臣下の節操を明らかにするさまを見ることができます。それによって、必ずこの方面の状況はしばらく安定するでしょう。

旧徳 徳の高い老人。徳望のある老臣。蔡邕「焦君贊」(『全後漢文』巻七四)「惜しき哉朝廷、茲の旧徳を喪い…」。

挙事 仕事をする。『管子』形勢「伐矜して専を好むは、挙事の禍なり」。

允愜 まことによくかなう。適切である。『顔氏家訓』書証「然して其れ文義允愜にして、實に是れ高才あり」。

隕穰 行き詰まって望みを失う。思い通りにならなくて苦しむ。『礼記』儒行「儒に貧賤に隕穰せず、…有司に閔まされざる有り」。

於 錢本は「于」に作る。

蒼黄 糸が青にも黄色にも染まることから事物が変化して定まらないたとえ。『墨子』所染に抛る。孔稚珪「北山移文」(『文選』巻四三)「豈に終始参差し、蒼黄翻覆し、翟子の悲しみに涙き、朱公の哭に慟まんことを期せんや」。杜甫「新婚別」(〇二五七『詳注』巻七)「誓いて君に随いて去かんと欲するも、形勢反りて蒼黄たり」。

臨危制変 危機に臨んで変事を抑える。『三国志』巻三・明帝紀「司馬懿は臨危制変、淵を擒うること日に計りて待つべきなり」。

勲庸 てがら。『後漢書』巻七〇・荀彧伝「勲庸崇著なると雖も、猶お忠貞の節を秉る」。杜甫「水宿して興を遣り群公に呈し奉る」(一三二四『詳注』巻二一)「勲庸樹立せんと思ひ、語黙端倪すべし」。

「庸」朱注に「一に猷に作る」とある。

泥塗 泥道。災難や苦しい状況に陥ることのたとえ。曹植「白馬王彪に贈る一首」（『文選』卷二四）「霖雨は我が塗を泥にし、流潦は浩として縦横たり」。何遜「建安王に与えて秀才を謝するの箋」（『全梁文』卷五九）「州民の泥塗、何遜の死罪なり」。杜甫「大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿唐峽を出で久しく夔府に居り將に江陵に適かんとし漂泊して詩有り、凡そ四十韻」（一三〇五）『詳注』卷二一）「旄頭（吐蕃）初めて傲擾し、鶉首（長安地方）泥塗に麗く」。

已墜 陥りつつある。王儉「褚淵の碑文」（『文選』

卷五八）「王維（帝王の政治の大綱）を已に墜ちたるに拯う」。

朱注に「今本は、『之際』以下二十三字誤りて後の『鎮撫不缺』の句の下に在り」とある。つまり、この段は「其次付重臣舊徳、智略經久、舉事允愜、不隕穫於蒼黃、整頓理體、竭露臣節、必見方面小康也」となっていて、第六段の末尾が「亦願任使舊人、鎮撫不缺之際、臨危制變之明者、觀其樹勳庸於當時、扶泥塗於已墜」となっている。テクニストがあつたとされる。

理体 治政の綱要。『資治通鑑』唐紀二五・中宗景

帝二年の胡三省注「理体は、猶お治体と言うがごときなり、高宗（李治）の諱を避け、治を以つて理と為す」。杜甫「伐木を課す」（一一二一）『詳注』卷一九）「蕭蕭として理体淨く、蜂蠆敢て毒せず」。

小康 状況がやや安らかに治まっている。『詩經』大雅・民勞「民亦た勞せり、汽わくは小康すべし」。杜甫「壯遊」（前出）「聖哲仁恕を体し、宇県復た小康なり」。

【五】

今梁州既置節度、與成都足以久遠相應矣。東川更分管數州於内、幕府取給、破弊滋甚。若兵馬悉付西川、梁州益坦爲聲援、是重斂之下、免至多門、西南之人、有活望矣。必以戰伐未息、勢資多軍、應須遣朝廷使舊人授之使節。留後之寄、綿歷歲時、非所以塞眾望也。臣於所守封界、連接梓州、正可爲成都東鄙、其中別作法度、亦不足成要害哉、徒擾人矣。伏惟明主裁之。又天下徵收赦文、減省軍用外、諸色雜賦名目、伏願損之又損之。劍南諸州、亦因而復振矣。

今梁州既に節度を置き、成都と以つて久遠に相応ずるに足るなり。東川は更に數州を内より分管せられ、幕府の取給は、破弊滋甚し。若し兵馬悉く西川に付し、梁州益垣らかに声援を為さば、是れ重斂の下、多門に至るを免れ、西南の人、活望有らん。必ず戦伐未だ息まず、勢は多軍に資するを以つて、応に須らく朝廷をして旧人を任使之に使節を授けしむべし。留後の寄、歳時を綿歴するは、衆望を塞す所以に非ざるなり。臣守る所の封界に於けるや、梓州に連接すれば、正しい成都の東鄙為りて、其の中別に法度を作るべきも、亦た要害を成すに足らず、徒らに人を擾すのみならん。伏して惟う明主之を裁かんことを。又天下の徴収を赦す文にて、軍用を減省するの外、諸色の雜賦の名目、伏して願わくは之を損じて又之を損ぜんことを。劍南の諸州、亦た困しむも復た振わん。

現在すでに梁州に山南西道節度使を置いており、成都の劍南西川節度使とは、遠方からであつても十分に呼応できます。また一方では、劍南東川節

度使は數州が域内から他の節度使へと管轄を変えられたために、その官署への物資の供給がたいへんに不足しています。そこで兵士と軍馬をすべて劍南西川節度使に付属させ、梁州の山南西道節度使が今までより安定した支援をうとしましう。すると、ここでは重税がかけられ多くの役所に納税に行かなければならない現状なのですが、それを免除されて、西南地域の人々は生きる希望が持てるようになります。それでも戦乱はまだ収まらず、その情勢から見ても多くの部隊に軍資を出す必要があります。そのため、かならずや朝廷が徳の高い老臣を任用して節度使の職を授けるべきなのです。節度使の職を非正規である留後の者に委ねた状態が何年も続いています。これは民衆の希望を満足させるやり方ではありません。私が守る圓州の境界は、梓州に連なっています。この梓州は成都の東の辺鄙な場所ですから、もし特別に法令制度が設けられて梓州で留後が認められたとしても、それはやはり要害の守りとするには不十分で、むだに人心をかき乱すだけでしよう。賢明な陛下にこれを裁定していただきたく伏してお願しいたします。さらに国中の徴収を赦免する文書

を發して、軍事費用を減らすほか、雑多な税の種目を減らしていくことをお願いいたします。すると劍南の諸州は、苦しい状況から復興できるでしょう。

梁州 現在の陝西省漢中市。山南西道の治所。

久遠 広くはるかである。『漢書』卷二二・礼楽志「吾が易は久遠」の顔師古注「久は猶お長のごときなり、自ら疆易（領土）遠大なりと言うのみ」。

分管 分けて管轄する。第二段の「山南」の注に引いた『元和郡県志』では閬州は山南西道節度使の管轄となっている。しかし同じく『新唐書』卷六七・方鎮表四・広徳元年の記事では、閬州は山南西道節度使の所領に入っていない。一方、『新唐書』卷六八・方鎮表五・至徳二載（七七五）には「劍南東川節度使を置き、…閬…十二州を領め、梓州に治す」とある。そこで、閬州はもとは劍南東川節度使の管轄だったが、後に山南西道節度使の管轄となったことがわかる。先に「況臣本州、山南所管」とあるので、本文が書かれた広徳元年において閬州は実質的には山南西道節度使の管轄となっていたのだろう。

取給 供給を受ける。人や物を取って求めるところに給する。『史記』卷一二九・貨殖列伝「今生を

治むるに身を危くするを待たずして給を取るは、則ち賢人焉これを勉む」。

破弊 壊し損なう。『史記』卷六九・蘇秦列伝「斉を破、敝して燕の為にせんと欲す」。

「弊」全唐文は「敝」に作る。

坦 たいらか。ここでは、安定した、という意味である。張本の注に「坦の字は訛に似たり」とある。また謝本の注に「疑うらくは当に『恒』に作るべし」とある。

声援 遠くから支援する。本来は軍事に用いる語。

『三国志』卷七・呂布伝の裴松之注に引く『英雄記』「（袁）術乃ち兵を嚴いめて（呂）布の為に声援を作す」。

重斂 苛税。

「斂」高本・錢本・張本は「斂」に作る。

至 高本・朱本・張本・仇本は「出」に作る。

多門 政令を出す多数の所。『左伝』襄公三十年「まつりごと政門多くして、以つて大国にはさまる」の杜預注に「政一人に由らず」とある。杜甫「韋諷が閬州録事參軍に上るを送る」（〇七七〇『詳注』卷一

三)「誅求何ぞ多門なる、賢者徳を為すを貴ぶ」。本文では巴蜀に節度使が多く置かれていることを指す。その状況については、朱注に「東川と山南と壤を接し、山南既に節度を増す。東川の兵馬便ち并せて西川に付け、幕府の繁費を減省すべし。高適奏して東川節度を罷め、以つて劍南を一にし、西山の不急の城、稍以つて減削するを請うは、意亦た公と同じなり」とある。この高適の上奏は、『旧唐書』卷一一一・高適伝に載せられる。

旧人 年老いた徳の高い旧臣。『書経』盤庚上「いにしえ

我が先王、亦た惟れ旧人を任じて政を共きせしむることを図る」。劉開揚は、その意は嚴武にあるとする(「杜文窺管統編」『柿葉楼文集』五六四頁)。

任使 任用する。仕事を委ねる。班彪「王命論」(『文選』卷五二)「五に曰わく、人を知りて善く任使す」。

使節 使者または派遣され駐在する官吏。ここでは節度使を指す。杜甫「嚴中丞駕を枉げ過ぎらる」(〇五三四『詳注』卷一一)「川東西を合し使節を瞻み、地南北を分かち流萍に任す」。

留後 官職の名。節度使に事故などがあると、その子弟または信任されている將軍や官吏が職務を代行し、節度留後と称することがあった。また叛將が節度使を倒してみずから留後と称し、後に朝廷から正式に任命される者もあった(『新唐書』卷五〇・兵志)。朱注に「時に章梓州彝いは東川留後為り、故に言う」とある。杜甫「冬狩行」(〇六九二『詳注』卷一二)の原注に「時に梓州刺史章彝、侍御史を兼ねて東川に留後たり」とあるように、章彝はこの時期梓州刺史・東川節度留後であつた。

綿歴 長く続く。

歳時 歳月。杜甫「田父の泥飲して嚴中丞を美よするに遭う」(〇五三五『詳注』卷一一)「名は飛騎の籍に在りて、長番歳時久し」。

臣於 張本は「臣于」に作る。

封界 境界。

「封」朱本は「分」に作る。

梓州 現在の四川省綿陽市三台県。閬州の西境と接する。

法度 法令制度。『書経』大禹謨「無虞を傲けい戒かいし、法度を失う罔かれ」。杜甫「高司直の封閬州を尋

ぬるを送る」(一一二六八『詳注』卷二一)「抜きて天軍の佐と為し、王の法度を崇しび大にす」。

要害 身体の急所を指し、軍事面での要地にたとえる。買誼「過秦論」(『文選』卷五一)「良將勁弩は、要害の処を守る」。

矣 朱本は「已」に作る。

又天下 高本は「尺天下」、朱本・張本・仇本は「救天下」に作る。

減省 節約する。『史記』卷六・秦始皇本紀「請う：四辺の成軫(軍事輸送)を減省せんことを」。

軍用 軍の費用。『漢書』卷七八・蕭望之伝「百姓猶お賦を加えず、而して軍用にて給す」。

雜賦 農地以外にかかる各種の附加税。

損之又損之 「損」はへらす。『老子』第四八章「学を為せば日に益し、道を為せば日に損す。之を損して又損し、以って無為に至る」。

朱本・仇本は「省之又省之」に作る。

劍 宋本・高本・全唐文は「劍」に作る。

【六】

將相之任、内外交遷、西川分壺、以仗賢俊。愚臣特望以親王總戎者、意在根固流長、國家萬代之

利也、敢輕易而言。次請慎擇重臣、亦願任使舊人、鎮撫不缺。

將相の任は、内外交遷するに、西川に壺を分かつは、以えらく賢俊に仗らんと。愚臣特に親王を以つて戎を総べしむるを望むは、意は根固くし流れ長くするは、國家萬代の利なるに在りて、敢て輕易にして言わんや。次に慎みて重臣を択ぶを請い、亦た願わくは旧人を任使し、鎮撫するに欠けざらんことを。

文武の大官は、内外を交互に転任しますが、南西川の地での権限を分担するのは、才徳の優れた人物に頼みたいと思います。特に陛下のご兄弟や皇子様を節度使とされることを愚かな私は望んでおります。これによつて木の根がしっかりと張つて川の流れが長く続くように安定して永続する統治がこの地に行われれば、國家の何代にもわたる利益になると思うためであり、決して輕はずみに申し上げているものではありません。続いて重臣を慎重に選び、さらに願わくば徳の高い老臣を任用して補佐としていただければ、この地の民を安ん

じるのに不足はありません。

将相 将帥と丞相。ひろく文武の大官を指す。杜

甫「八哀詩、贈左僕射鄭國公嚴公武」(〇九四六『詳注』卷一六)「口を開けば将相を取らんとしようも、小心友生に事う」。

分壺 「壺」はしきい、しきみ、門の内外のしきりの意味で「鬪」に通じる。「分鬪」は『史記』卷一〇二・馮唐列伝の叙述に基づく語で、將軍に任ぜられて内政・外征を明確に分けて外征についての権限と責任を分担することを言う。『文心雕竜』檄移「故に鬪を分かちて穀を推し、辞を奉じて罪を伐つは：」。杜甫「荆南兵馬使太常卿趙公の大食刀の歌」(一〇五六『詳注』卷一八)「芮公首を廻らして顔色勞れ、鬪を分かち世を救うに賢豪を用う」の「鬪」の仇注に「一に壺に作る」とある。

「壺」高本は「壺」に作る。朱本・仇本は「鬪」に作る。

賢俊 才や徳の秀でた人。杜甫「興を遣る五首」其一(〇二七二『詳注』卷七)「昔時賢俊の人、未だ遇わざるは猶お今を視るがごとし」。

総戎 軍事を統括する。軍隊を率いる。『魏書』卷

五〇・尉元伝「律を奉じて戎を総ぶ」。また、武官の別称に用いられ、唐では節度使を「総戎」と称した。杜甫「將に成都の草堂に赴かんとして、途中作有り、先に嚴鄭公に寄す五首」其五(〇七三六『詳注』卷一三)「共に説かん総戎雲鳥の陣を、妨げず遊子芰荷の衣」の仇注に「唐人節度を以つて総戎と為す」とある。

「總」宋本・高本は「摠」に作る。

根固 根をしっかりと張る。国家が永続すること

のたとえ。『老子』第五九章「是れを根を深くし根を固くすと謂う、長生久視の道なり」。

流長 川の流れが長い。權勢が長く続くことのとえ。張衡「西京賦」(『文選』卷二)「流れ長ければ則ち竭き難く、根深ければ則ち朽ち難し」。

輕易 軽佻浮薄である。『南史』卷三四・周捨伝「帝(沈)約輕易にして徐勉に如かざると以う」。

【七】

借如犬戎俶擾、臣素知之。臣之兄承訓、自沒蕃已來、長望生還、偽親信於贊普、探其深意、意者報復摩彌青海之役決矣。同謀誓服、於前後沒落之

徒、曲成翻動、陰合應接、積有歲時。每漢使廻、蕃使至、帛書隱語、累嘗懇論。臣皆封進、上聞屢達。臣兄承訓憂國家緣邊之急、願亦勤矣。況臣本隨兄在蜀向二十年、兄既辱身蠻夷、相見無日。臣比未忍離蜀者、望兄消息時通、所以戮力邊隅、累踐班秩。補拙之分淺、待罪之日深、蜀之安危、敢竭聞見。臣子之義、貴有所盡於君親。愚臣迂闊之說、萬一少裨聖慮、遠人之福也、愚臣之幸也。

借い如し犬戎擾を倣すも、臣素より之を知る。臣の兄承訓は、蕃に没せしより已來、長く生還を望み、偽りて贊善に親信せられ、其の深意を探るに、意は摩弭青海の役に報復せんとすること決したり。同謀衆に誓い、前後没落せるの徒に於いて、曲さに翻動を成し、陰かに応接を合わせ、積ねて歲時有り。漢使廻り、蕃使に至る毎に、帛書の隱語もて、累ねて嘗に懇ろに論ず。臣皆封して進め、上聞屢達す。臣の兄承訓は國家緣邊の急を憂い、亦た勤むるを願えり。況んや臣本兄に隨いて蜀に在ること二十年に向とするも、兄既に身を蛮夷に辱しめ、相見るに日無きをや。臣比未だ蜀を離るるに忍びざる者は、兄の消息時に通ずるを望み、

辺隅に戮力し、累ねて班秩を踐む所以なり。拙を補うの分浅く、罪を待つの日深きも、蜀の安危に、敢て聞見を竭くさん。臣子の義は、君親に尽くす所有るを貴ぶ。愚臣迂闊の説、万一にも少しく聖慮を裨わば、遠人の福いにして、愚臣の幸いなり。

たとえもし吐蕃が擾乱を起こそうとも、私は前もってそれを知ることができません。私の兄の承訓は、吐蕃に捕らわれて以來、長らく生還を望みつつ、偽って吐蕃の君主に信任されるようにして、その隠された真意を探ったところ、その意図することは摩弭青海の戦役への報復に間違いないとのこと。兄の謀略に参与している者は衆人に誓いを立て、先後して敵の手に落ちた者たちと綿密に謀反の計画を立て、ひそかに交流しつつ年月を重ねています。そして唐の使者と吐蕃の使者が行き来するたびに、絹の書信に秘密の文を記して伝え合い、重ね重ねいつも細やかに情勢を論じています。私はそれらの兄からの書信をみな封をして進呈し、朝廷に報告し続けています。私の兄の承訓は、國家の辺境の危機を憂えて、さらに勤めを

果たすことを願っています。私はもともと兄に従って蜀に来てから二十年になろうとしていますが、兄はすでに吐蕃に捕らわれる辱めを受け、再会はいつの日かわからないのでなおさら私の思いは強くなっています。私が今まだ蜀を離れることができないのは、兄の音信が時折通じるのを待ち望みつつ、辺境で努力して、職務を遂行しようとしているためです。私は拙い能力を補う資質にも乏しく、むだに官職に就いていますが、蜀の危機的狀況にあつて、あえて知見を尽くしたく思います。臣下の道義は、君主に尽くすことを尊ぶものです。愚かな私の空想的な論説が、ほんのわずかでも陛下のご思慮のお助けになれば、遠方にいる兄にとつて幸いであり、また愚かな私にとつても幸いです。

倣擾 擾乱を起こす。「倣」の音は「しゅく」。『書経』胤征「惟れ時の義和、厥の徳を顛覆し… 倣はしめて天紀を擾り、厥の司を遐棄す」。杜甫「大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿唐峽を出で久しく夔府に居り將に江陵に適かんとし漂泊して詩有り、凡そ四十韻」（前出）「旄頭初めて倣擾し、

鶉首泥塗に麗く」。

承訓 人名。圓州刺史王某の兄。蕭本の注では、張九齡「西南蛮の元首領の蒙婦義に救する書」（『全唐文』卷二八七）の「今故に内給事王承訓をして往き、一一口具せしむ」などの文に見える王承訓がその人であろうとする。また鄭回「南詔德化碑」（『金石萃編』卷一六〇）に「王姓は蒙、字は闍羅風。…又中使王承訓と共に劍川を破る」とあり、清・馮甦撰『滇考』南詔始興に「（開元）二十五年、（皮羅閣と）御史嚴正誨と謀りて吐蕃を撃ち、…既にして又中使王承訓と共に劍川蛮・瀾河蛮を破る」とある。これらの資料の「内給事」「中使」の称から、王承訓は玄宗が南詔を宣撫するために派遣した宦官だとされる。

沒蕃 身柄を吐蕃に抑えられている。蕭本の注では、天寶十載に南詔が唐に叛いて吐蕃に投じた時、唐の朝廷の特使である王承訓を吐蕃に捕虜として献じたとされる。

已來 高本・朱本・張本・仇本・全唐文は「以來」に作る。

於 錢本・張本は「于」に作る。

贊普 吐蕃の君長の称号。『新唐書』卷二一六上・

吐蕃伝上「其の俗に強雄を謂いて贊と曰い、丈夫を普と曰い、故に君長を号して贊普と曰う」。杜甫「近ごろ聞く」(〇八八五『詳注』卷一五)「聞くが似し贊普更に親を求むるを、舅甥和好に棄て難かるべし」。

宋本は「普贊」に作る。

深意 深く隠された真意。『後漢書』卷七九下・李育伝「嘗て左氏伝を読み、文采を楽しむと雖も、然れども聖人の深意を得ざると謂えり」。杜甫「蘆子を塞ぐ」(〇一五四『詳注』卷四)「蘆関は両寇を扼す、深意実に此に在り」。

摩弥青海之役 唐と吐蕃の間の戦役の名。蕭本の注では、郭声波「唐弱水西山羈縻州及保寧都護府考」(『中国史研究』一九九九年第四期)によつて、摩弥城は白蘭国(羌族の国の一つ)にあり、あるいはその都城で現在の青海省ゴロクチベツト族自治州達日県あたりだとする。そして、摩弥青海の役は以下の資料などに見える唐と吐蕃の間の戦役を指すとする。『旧唐書』卷一〇四・哥舒翰伝「明年(天宝七載)神威軍を青海の上に築く。吐蕃至り、攻めて之を破る。又城を青海中の竜駒島に築く。∴吐蕃屏跡し、敢て青海に

近づかず」。顔真卿「中散大夫京兆尹漢陽郡太守贈太子少保鮮于公神道碑銘」(『全唐文』卷三四三)「公大任に当り、∴射して吐蕃の摩弥城を討ち、之を抜く。洪州を改めて保寧都護府と為し、弱水を壅して蕃漢の界と為す」。

同謀 謀略に参与する人。『宋書』卷一・武帝紀上「高祖同謀の周安穆を遣りて之を報ぜしめ、内応を為さしむ」。

没落 敵の手に落ちる。『魏書』卷八・世宗紀「兵士の鍾離に没落せる者、一房に田租三年を復すと詔す」。

翻動 蕭本の注では「曲成翻動」で「いろいろな手段を使って反乱する」と解釈される。木華「海賦」(『文選』卷一二)に「翻動して雷を成し、擾翰して林を為す」とあり、杜甫「路に襄陽の楊少府が城に入るに逢い、戯れに楊四員外綰に呈す」(〇二四二『詳注』卷六)に「竜蛇の窟を翻動し、鳥獸の形に封題す」とあるが、これらは「勢いよく動く」の意味であり、「反乱する」の意味での他の用例は未見。

「翻」、宋本は「飜」に作る。

応接 交際し接待する。杜甫「秦州を発す」(〇三

五二『詳注』卷八)「応接は本性に非ず、登臨未だ憂いを銷さず」。

漢使 ここでは唐の使者。杜甫「盜賊の総て退くを開くを喜び口号す五首」其四(一二九八)『詳注』卷二一)「旧漢使もとに隨う千堆の宝、少わずかに胡王に答う万匹の羅」。

迴 高本・錢本・朱本・張本・仇本・全唐文・謝本は「回」に作る。

帛書 絹に書かれた書信。『漢書』卷五四・蘇武伝「天子上林中に射し、雁を得、足に帛書の係る有り」。

隱語 本意を直接言わずに別の言葉借りて暗示した文。『文心雕竜』諧譏「隱語の用、紀伝に被す」。

封進 全唐文は「進封」に作る。

縁辺 辺境。『史記』卷一一〇・匈奴列伝「縁辺亦たおのおの各堅守して以って胡寇に備う」。杜甫「秦州雜詩二十首」其四(〇二八七)『詳注』卷七)「鼓角縁辺の郡、川原夜ならんと欲する時」。

夷 朱本は欠字とする。

無日 いつの日かわからない。趙至「嵇茂齊に与うる書」(『文選』卷四三)「手を携うるの期は、邈として日無し」。杜甫「即事」(一二三一)『詳注』

卷二〇)「多病の馬卿起くるに日無く、窮途の阮籍幾時か醒むる」。

戮力 努力する。または力を合わせる。『書経』湯誥「之と戮力し、以って爾なんじ有衆の与ために命を請う」。杜甫「柏中丞兼ねて子姪数人除官の制詞を覽、因りて父子兄弟の四美を述べ糸綸を歌うを載す」(一〇四九)『詳注』卷一八)「深誠は王室を補い、勳力は元昆よりす」。

辺隅 辺境。杜甫「歲暮」(〇六九七)『詳注』卷二)「歲暮遠く客と為り、辺隅還なお兵を用う」。

班秩 官吏の等級。杜甫「李十五秘書文蔚ぶんぎやくに寄せ奉る二首」其二(〇八九三)『詳注』卷一五)「班秩通貴を兼ね、公侯異人を出だす」。

待罪 官吏が職務についているのを謙遜して言う。その職に堪えないので罪を得ると言うこと。司馬遷「任少卿に報ずる書」(『文選』卷四一)「僕先人の緒業に頼り、罪を輦輶の下に待つを得ること、二十余年なり」。

臣子 人の家来であり、人の子である者。または家来。杜甫「客居」(〇八六三)『詳注』卷一四)「儒生老いて成す無く、臣子四藩を憂う」。

君親 君主と父母。または君主。李陵「蘇武に答う

る書」(『文選』卷四一)「君親の恩を違棄し、長らく蛮夷の域と為る、傷しいかな」。また臣子と君親を対比して用いる例に、葛洪『抱朴子』酒誡「臣子は君親の前に失礼し、幼賤は普宿の坐に悖慢す」がある。

迂闊 現実とかけ離れている。『漢書』卷七十二・王吉伝「上其の言の迂闊なるを以って、甚しくは寵異せざるなり」。

「迂」宋本は「返」に作る。

遠人 遠くへ行っている親しい人。『詩経』齊風・甫田「遠人を思う無かれ、勞心切切たり」。

【八】

昨竊聞、諸道路出吐蕃已來、草竊岐隴、逼近咸陽。似是之間、憂憤隕迫、益增尸祿寄重之懼、寤寐報效之懇。謹冒死具巴蜀成敗形勢、奉表以聞。

昨に窃かに聞く、諸の道路より吐蕃を出だして已來、岐隴を草竊して、咸陽に逼近せりと。是の似きの間、憂憤隕ち迫り、益尸祿寄重の懼れ、寤寐報効の懇を増す。謹みて死を冒して巴蜀の成敗形勢を具にし、表を奉りて以って聞す。

側聞したところでは、多くの道筋より吐蕃の進出を許して以來、岐山と隴山が略奪にみまわれ、長安にまで接近されたとのこと。このような状況で、憂い憤りが胸に迫り、重い俸禄をむだに頂いて何もできないことをおそれ、日夜恩に報いて力を尽くそうとする思いがますます強くなっています。つつしんでわが命すら顧みずに巴蜀の成功と失敗の状況を具申し、表を奉って申し上げます。

出 錢本・朱本・張本・仇本・全唐文は「云」に作る。

草竊 掠奪する。『書経』微子「殷は小大とも草竊、姦宄を好まざる罔し」。

岐隴 山の名。岐山と隴山。岐山は現在の陝西省岐山県にある。隴山は現在の六盤山の山脈の南部。六盤山は寧夏回族自治区西南部から甘肅省東部に連なる。

逼近 迫り近づく。『後漢書』卷七一・朱儁伝「(張)燕後に漸く河内に寇し、京師に逼近す」。

咸陽 長安を指す。ここに記された吐蕃の侵略については、『旧唐書』卷一一・代宗紀に「是の月(広

徳元年七月)、吐蕃大いに河・隴に寇し、我が秦・成・渭三州を陥れ、大震関に入り、蘭・廓・河・鄯・洮・岷等の州を陥れ、盗みて隴右の地を有つ。：冬十月庚午朔。辛未、高暉吐蕃を引きて京畿を犯し、奉天・武功・盩厔等の県に寇す。：戊寅、吐蕃京師に入る」とある。

尸禄 空しく俸禄をもらつて職務を尽くさず、何もしないでいる。『説苑』至公「久しく高位を踐み、群賢の路を妨げ、尸禄素飧、食欲にして獸く無し」。

寤寐 日夜渴望する。『詩経』周南・関雎「窈窕たる淑女は、寤寐に之を求む」。

報効 恩に報い力を尽くす。杜甫「社日両篇」其一(一一九一『詳注』卷二〇)「報効神在すがごとく、馨香旧と違わず」。

「效」宋本・錢本・朱本・張本・仇本・全唐文は「効」に作る。

冒死 生命の危険を顧みない。『後漢書』卷一六・寇荣伝「故に死を冒して闕に詣り、肝胆を披き、腹心を布かんと欲す」。

成敗 成功と失敗。『戦国策』秦策三「聖主は成敗の事に明らかなり」。杜甫「韓諫議注に寄す」(一〇

九九八『詳注』卷一七)「国家の成敗吾豈に敢てせんや、色腥腐を難み楓香を餐う」。

形 朱注に「一に之に作る」とある。

付記

本稿はJSP科研費21K00321による成果の一部である。